

ディドロと匿名のジレンマ ——後世・地下文書・共同執筆

藤原 真実

フランス啓蒙主義を代表する思想家であり、『百科全書』の編集責任という巨大な事業を成し遂げたドゥニ・ディドロは、著作のほとんどを存命中に出版しなかった。ディドロの網羅的な書誌を著したアダムスは、死後出版の著作がこれほど多い作家は18世紀でもほかに例がないと述べている¹。『百科全書』と一部の自著は出版したが、多数の著作を秘匿性の高い手書きの定期発行者『文芸通信』に掲載し、あるいは「紙挟み」のなかにしまい込んで死後出版の運命に委ねた。ディドロがそのような活動形態をとるきっかけを作ったと考えられているのが、1749年の投獄である。当時35歳のディドロは、『盲人書簡』を無署名で印刷させた直後に逮捕され、約70日間ヴァンセンヌに幽閉された。作家としては駆け出しの時期に味わったこの辛酸が、その後の執筆活動に大きな影響を与えたことは十分理解できる。だがその一方でディドロは『百科全書』の編集・執筆に精力的に取り組み、1751年に刊行を開始したこの辞典のタイトルページには、自らの名を堂々と掲げている²。『百科全書』は、20年以上にわたる刊行の過程で、イエズス会をはじめとする反対勢力が

¹ David Adams, *Bibliographie des œuvres de Denis Diderot, 1739-1900*, Centre International d'étude du XVIIIe siècle, 2000, t. 1, p. 9. しかしディドロの存命中にその著作が全く印刷されなかったわけではない。アダムスの書誌は、ネジョンが「ディドロはいかなる著作も発表しなかった」という1765年から1779年にも、比較的当たり障りのない著作が、多くはディドロの了解なしに、匿名で印刷されていたことを示している。*Ibid.*, p. 19.

² ただし1765年に刊行された最後の10巻と1762年から1772年に刊行された図版にはディドロの名前は記されていない。Cf. *ibid.*, p. 15.

ら激しく攻撃され、発売禁止(1752年)、断罪と出版特認の取り消し(1759年)など、数々の苦難に遭遇した。しかし、マルゼルブのような良識ある行政官が黙許や黙認といった「抜け道」の活用を暗に進め、またポンパドゥール夫人のような有力者の庇護もあったおかげで、合法出版から地下出版へと方法を変えながらも出版を完結させることができた³。さらにイエズス会が勢いを失い、1762年にはフランスから追放されたことで、出版をめぐる環境は一時期に比べて穏やかになっていった。実際に、ヴォルテール、ドルバック⁴、ルソーのような作家は次々に著作を活字にして発表していた。ヴォルテールとドルバックは無署名、偽名、架空の出版地などの方法を駆使したが、ルソーは署名入りでほとんどの作品を発表した。その傍らにいて、ディドロはなぜ同じように自らの著作を活字にしようとしなかったのか。実際にディドロの著作集を刊行する計画がなかったわけではない。1770年代のディドロにはそれを実現する力も時間も方法もあったと考えられている⁵。にもかかわらず、ヴァンセンヌ以後35年にわたり活発な著述活動を続けながら、なぜ著作の大半を後世の評価に委ねたのか。

アーサー・ウィルソンはその古典的名著『ディドロ』において、同時代の無理解、思想弾圧、そして後世への絶対的な信頼という理由を挙げてこの疑問に答えている⁶。ディドロの著作は革新的で同時代の理解を超えているため、正当な評価が得られない。また迫害や弾圧を回避するために「皮肉で秘儀的で曖昧⁷」な表現をせざるを得ない。だからディドロは、十全な思想の自由をもって書くために、「後世」という読者を選んだ。ウィルソンはそうように説明し、最晩年の著作『セネカ論』から、そのようなディドロの生き方を伝える次の一節を引用している。

³ 木崎喜代治『マルゼルブ フランス一八世紀の一貴族の肖像』岩波書店、1986年、p. 66-71.

⁴ ドルバックの作者性については、以下の論文を参照のこと。Franck Salaün, « Diffuser la bonne doctrine : La propriété dans le *Système social* et *La Politique naturelle* », *La Lettre clandestine*, n° 22, 2014, p. 53-66.

⁵ Arthur M. Wilson, *Diderot*, Oxford U.P., 1972, p. 717 ; *Diderot : Sa vie et son œuvre*, Laffont-Ramsay, 1985, p. 597.

⁶ *Ibid.*, p. 714-717 ; p. 596-597.

⁷ *Ibid.*, p. 716 ; p. 597.

専制的な政体が行う束縛は気づかぬうちに精神を萎縮させる。私たちは自らに傷を負わせるであろう障害物を避けるように、或る種の強固な思想を無意識に自らに禁じる。人が思考し力強く語るのはもっぱら墓穴の奥底からである。その場所にこそ自らを置くべきであり、その場所からこそ人々に語るべきである⁸。

同様の疑問を論じた比較的最近の研究としては、パスカル・ベルランの論文「ディドロと後世への呼びかけ」⁹がある。ベルランは上記のウィルソンの説に言及し、ヴァンセンヌ投獄や『百科全書』の断罪などの客観的な理由を挙げた上で、ディドロが自らの著作との間にもつ独特で風変わりな関係を説明するにはそれでは不十分だと指摘する。——ドルバック、ネジョンのように秘密裡に非法出版で活躍することはしないが、それらとまったく無関係というわけでもなく、ひそかに他人の著作の中に入り込んで政治的態度を明らかにする。ヴォルテールのように非法にでも自身の著作は活字にせず、しかし公的には『百科全書』の編集責任者として姿を隠そうとはしない。ベルランはこの「矛盾」を説明するために、ディドロが他人の作品の外と内に同時に身を置き、読者から作者へ、作者から読者へと行き来するその「循環運動」に注目する。ディドロはそうすることで、表向きには自らのものではない著作を「弁護」し、思想を推進すると指摘する¹⁰。他人の著作の読者にして作者というあり方はディドロの執筆の特徴をよく捉えており、その循環運動の中で晩年のディドロが急進的な思想を醸成させていったとするベルランの説明にはうなずけるところがあるが、弁護人 *avocat* というキーワードを繰り返し用いてディドロが他人の著作の中に入り込んだ目的を説明する点には再考が必要であろう。いづれにしても、本論の疑問は依然として残り続ける。あれほど作家としての名声を求めたディドロが、後世における名声という「はるかなコンサート」¹¹だけで本当に

⁸ *Essais sur les règnes de Claude et de Néron*, DPV, XXV, p. 249. Cit. Wilson, *ibid*.

⁹ Pascale Pellerin, « Diderot et l'appel à la postérité : une certaine relation à l'œuvre », *RDE*, n° 35 2003, p. 25-39.

¹⁰ Pellerin, article cité, p. 29.

¹¹ Lettre II, Falconet à Diderot, *Le Pour et le contre, ou Lettres sur la postérité*, DPV, t. XV, p. 30.

満足できたのか。自らの最も尊い部分、自分自身でもあるような著作を、なぜ手稿のまま据え置き、後世という不確かなものに委ねることができたのか。彫刻家ファルコネは、ディドロとの往復書簡の中で、まさにこの後世の不確かさについて、次のような問いを投げかけている。

しかし、作品が失われ、破棄されてしまった幾多の大人物たち、自分の作品を無関係な人の作品とされてしまった人たち、作品も名前も同じように埋もれてしまった人たちについて、君は何と言うのだろうか。まだ存在していない人々がいつか我々を称賛するだろう、と言った時、彼らは何という誤りを犯していたのだろうか。その日と称賛者たちはやって来たが、称賛の対象物はどこにあるのか¹²。

これに対してディドロは、彗星との衝突でも起こらないかぎり、著名人の著作、偉業、名前が失われる危険はないと楽観する¹³。しかし現実にディドロの死後に起こったのは、原稿の散逸や、テキストの真正さについての長い議論であり、研究者らの精力的な調査やいくつもの奇跡的な発見がなければ、いまだにディドロの著作の多くは埋もれたままであった。そのような危うい未来になぜディドロは賭けることができたのだろうか。この疑問に対する答えをあらためて探究することが本稿の目的である。そこで、まずヴァンセンヌ以前まで時間を遡り、ディドロが地下に潜行するきっかけとなった投獄までの経緯を、古い研究資料を読み直して詳しく考察する。次に、『文芸通信』と哲学的地下文書の手法を参照し、最後に『グリム氏宛てレナル神父弁護書簡』に示されたジレンマと共同執筆の問題を考えることをとおして、ディドロにおける作者と作品との関係を捉えなおしたい。

1. 包囲される匿名作者

1746年のはじめに無署名で発行されたディドロの『哲学断想』*Pensées*

¹² *Ibid.*, p. 7.

¹³ *Ibid.*, p. 30.

*philosophiques*には、書籍商・印刷業者の名もなく、発行地としてハーグの地名が記されていたが、実際にはパリで、書籍商ロラン・デュランと印刷業者ジャン＝バティスト・ドレピーヌによって発行されたことが知られている¹⁴。その翌年に刊行された所謂リベルタン小説『不謹慎な宝石』*Les Bijoux indiscrets*には、著者名、書籍商・印刷業者名はおろか、発行年さえ記されず、さらに発行地名として、かつて実在したアフリカの王国名モノモタパが記された。この地名は、主人公マンゴギユルがコンゴの王という物語の設定から考え出された一種の洒落である。出版は同じく書籍商デュランが、印刷はパリの印刷業者ピエール・ギヨーム・シモンが行ったことが知られている。さらに2年後の1749年6月に『盲人書簡』こと『盲人に関する手紙、目が見える人々のために』*Lettre sur les aveugles à l'usage de ceux qui voient*が刊行された。タイトルページにロンドンの発行地名が記されたほかは、著者に関しても、書籍商・印刷業者に関してもいっさい記載がない。ロンドンという地名も架空であり、実際にはパリで、やはり書籍商デュランと印刷業者シモンにより作られたことがわかっている。

当時の匿名出版にはさまざまな度合いがあるが、以上3点の著作の匿名は、最も強固な匿名のうちに入るだろう¹⁵。ニクラウスによれば、『哲学断想』の出版当初は、作者をヴォルテールと考えたり、ラ・メトリに関係づけたりする者もいた¹⁶。出版許可や黙許の申請もなしに非合法的に印刷された場合、大法官府にも組合にも記録が残らないため、出版の経緯を知る可能性が後世に対しても閉ざされることになり、

¹⁴ 書籍商・印刷業者の名が明かされた経緯については、以下で詳しく述べる。Cf. Frank A. Kafker et Jeff Loveland, « Diderot et Laurent Durand, son éditeur principal », *RDE*, n° 39, 2005, p. 30.

¹⁵ 当時の匿名のさまざまな度合いについては、以下を参照されたい。M. FUJIWARA, « L'anonymat et la paternité de l'œuvre en 1713 », G.A-Menant et C. Dornier dir., *Paris 1713 : L'Année des Illustres françaises*, Peeters, 2016, p. 295-307.

¹⁶ Robert Niclaus, « Introduction », *Pensées philosophiques*, édition critique avec introduction, notes et bibliographie par Robert Niklaus, Droz : Minard, 1957, p. viii. 断想形式で宗教に対するさまざまな立場を論じた同書は、1746年7月、ラ・メトリの『靈魂の博物誌』*Histoire naturelle de l'âme* (1745) とともにパルルマンによって断罪され、作者不詳のまま焚書となった。

バルビエ¹⁷のような匿名出版物の専門家にとっても難攻不落の匿名となる。ところが今日では、3著作の著者のみならず、書籍商・印刷業者も判明しているのはどのような経緯によるのか。以下ではそのことを考えるために、ディドロのヴァンセンヌ投獄前後の状況をあらためて考察する。

1749年の状況

1749年という年は、18世紀出版史のなかで注目すべき年であった¹⁸。バルビエの『日記』の補注者がその特徴を簡潔に述べている。

宗教に敵対する著作が現れ、増加するのはこの時からである。それまで一切はモリニストとジャンセニストの間で起こっていた。以後は懷疑主義と信仰との間で闘いが始まることになる。それまで諷刺歌謡の作者や詩人のことしか話題にしていなかったバルビエが、フィロゾフたちのことを話題にするようになる。真の18世紀はまさにここから始まるのである¹⁹。

こうした状況のもと、政府は急進的な思想表現を抑圧するために、没収、逮捕、投獄を頻繁に行った。ダルジャンソン侯爵は、その『回想録と日記』のなかで、作家が頻繁に逮捕される状況を次のように伝えている。「まるで異端審問のようだ、牢獄は満杯だから囚人をヴァンセンヌその他に入れるしかない、と嘆く人々がいる一方で、神、国王、良俗に反する著作活動の不行跡を絶つことに賛同する者もある²⁰。」

『盲人書簡』はまさにそのような時期に刊行されたのである。1749年7月23日付の封印状によりディドロは逮捕され、ヴァンセンヌに送られ、同年10月3日まで幽閉

¹⁷ A.-A. Barbier, *Dictionnaire des ouvrages anonymes et pseudonymes* [...], Paris, 1806-1809, 4 vol.

¹⁸ Franco Venturi, *La Jeunesse de Diderot, de 1713 à 1753*, Skira, 1939, p. 177-183 ; Arthur Wilson, *op. cit.*, p. 94-95 ; p. 80-81.

¹⁹ Edmond-Jean-François Barbier, *Chronique de la régence et du règne de Louis XV (1718-1763) ou Journal de Barbier, [...]*, Paris, Charpentier, 1857-1866, t. IV, 378, note 1.

²⁰ Voyer d'Argenson, *Journal et mémoires*, Paris, Vve. Jules Renouard, 1869, t. 6, p. 15.

されることになる。ジャック＝アンドレ・ネジョンは、その間のディドロについて、「いかに脅されようとも印刷者の名をけっして明かそうとしなかった」と述べ²¹、師の高潔さを讃えている。しかしながら、事実はそのとおりではなかったようだ。

ヴァンセンヌ獄のディドロ

当時の警察関係の古文書を詳しく調査したポール・ボヌフォンの論文「ヴァンセンヌ獄のディドロ」によると、警視総監ベリエによるディドロの訊問は、逮捕から1週間後の7月31日木曜日に行われた。訊問の内容は、『盲人書簡』、『不謹慎な宝石』、『哲学断想』、『懷疑者の散歩』 *La Promenade du sceptique* (1830)、『白い鳥』 *L'Oiseau blanc* (1798) について、それぞれの著作を書いたか、印刷させたか、その原稿を誰かに売ったかあげたかしたか、等々であり、ディドロはほぼすべての質問に「否」と答えている。ただし、『懷疑者の散歩』に関しては、それを書いたことを認め、その原稿の在処を聞かれると、「それはもう存在しない。焼いてしまったから」と答えている²²。ネジョンが『回想録』で述べる、いかなる脅しにも屈しない姿勢は、この訊問においてディドロが見せた態度に符合するといえるだろう。しかし、状況はその後大きく変化することになる。

ディドロの強硬な態度をみた警視総監ベリエは、8月1日、パリの書籍商デュランを召喚し、過去3年間に出版されたディドロの3著作を含む4点の著作の作者と印刷者について訊問した。ボヌフォンが引用したベリエとデュランの署名のある調書によれば、『哲学書簡』の原稿はディドロからデュランに、『不謹慎な宝石』と『盲人書簡』の原稿はディドロから印刷業者シモンに、いずれも印刷を目的として渡されたことをデュランは証言した²³。

警視総監がこうして情報を手にしたことを知らなかったのか、ディドロは8月10日頃に、警視総監に温情を求める長文の手紙を書き送っている。妻と娘の窮状を訴え、妻との面会を「涙ながらに」懇願し²⁴、自らが獄死する可能性をほのめかし、そ

²¹ J.-A. Naigeon, *Mémoires historiques et philosophiques sur la vie et les ouvrages de Denis Diderot*, 1821, p. 131.

²² Paul Bonnefon, « Diderot prisonnier à Vincennes », *RHLF*, 1899, n° 2, p. 208-209.

²³ *Ibid.*, p. 210.

²⁴ 「私は目に涙を浮かべ、あなたの膝をかき抱きながら、〔…〕あなたにそのこと〔妻との面

れまでのパリでの活動内容、『百科全書』の編集に取り組んでいることなどを紹介し、自身の清廉さを請け合い、後ろ盾となる有力者の名前を列挙した上で、以上の内容が、警視総監から求められていた「総懺悔／全面自供confession générale」だと述べている²⁵。さらに、自室に加えて隣室を使う自由と、本を手元に置いて読む自由を要求し、それが心身の健康を保つのに必要であり、それがなければ自殺の可能性もあることをあらためてほめかして手紙を締めくくっている²⁶。この長大で雄弁な手紙は、著作とその出版に関することに全くふれておらず、ペリエが求めた「全面自供」からはほど遠かった。

それとほぼ同時に、ディドロはダルジャンソン侯爵に宛てて、これより短い三人称体の手紙を送り、「〔或る誠実な男は〕肉体的にも精神的にも死ぬほどの苦痛を味わっている」と訴え、ヴァンセンヌの牢獄から解放してくれるよう、「侯爵の足下に身を投げだして」懇願している。しかし、逮捕の原因については相変わらず曖昧なまま、「犯した過ちについて遺憾に思い、決して同じ過ちをくり返さない覚悟」であり、その償いのためにも、『百科全書』を完成させたいと述べるにとどめている²⁷。

2通の手紙が状況を改善しないなか、ディドロは再び警視総監に宛てて手紙を書き、ついにすべてを告白した。この手紙の文面から、ディドロが手紙の執筆に先立ってペリエと言葉を交わし、交換条件の約束をとりつけていたことがわかる。悔悛し、二度とこうした本を書かないと約束するかわりに、再犯しないかぎり、自白のせいでディドロや他の誰かに害が及ぶことは決してないことをペリエに約束させたのである。そのうえでディドロは、この約束に「最大限の信頼」を置いて、『哲学断想』、『不謹慎な宝石』、『盲人書簡』が自らの著作であることを明言した。そればかりか、同じ手紙の最後には次のように書いている。

会を許すこと〕をお願いしております。」 *Ibid.*, p. 211 ; Diderot, *Correspondance*, éd. Georges Loth, Minuit, 1955, tome 1, p. 84.

²⁵ Bonnefon, *op.cit.*, p. 210-213 ; Diderot, *Correspondance*, *op. cit.*, p. 84-87.

²⁶ 自殺をほめかして相手の気持ちを揺さぶる手法は、『修道女』の主人公の手紙でも用いられている。

²⁷ Diderot, *Correspondance*, *op. cit.*, p. 89 ; Bonnefon, *op. cit.*, p. 213-214.

これらの著作の公刊に加担した人々に関しては、何一つ隠し立てしないつもりです。私は書籍商と印刷業者の名前をあなたの胸の奥底において証言するでしょう。お望みでしたら、彼らもあなたから目をつけられていることを私から彼らに伝えもしましょう。私がそうしようと決意したように、彼らも今後は分別をもって行動するようになるためにです²⁸。

告白の内容は、先に書籍商デュランから聴取していた内容²⁹と一致し、それから10日もたたないうちに、ダルジャンソン侯爵から警視総監に「国王の意向」が伝えられた。それによりディドロはヴァンセンヌの塔内からより快適な城館へ移され、「出版の仕事」〔百科全書の編集責任〕への考慮から、その業務または家庭の雑務のために来訪者との自由な会見を許されたうえ、仕事のための「一つか二つの快適な部屋」を与えられたのである³⁰。

密告者たち

このように、『盲人書簡』の出版は、著者の逮捕・投獄という結果を招いたが、印刷者、書籍商の名が秘匿されているなかで、警察はどのように作者を探し当てたのだろうか。そればかりか、先に印刷された『哲学断想』と『不謹慎な宝石』に加えて、まだ印刷されてもいない『懷疑者の散歩』や『白い鳥』の情報さえ官憲は手にしていたのである。そこで想起すべきは、ディドロのような「危険思想」の作家たちが官憲の監視網に捉えられていたこと、それには異端を監視する宗教者や出版業の関係者が密告者として協力していたことである。当時ディドロはバリのサン＝メダール小教区に住んでいたが、そこの司祭アルディ・ド・ルヴァレ（Hardy de Levaré）が密告者として知られている。ボヌフォンによると、司祭の告発はまず、当時造幣院公安警察の指揮官を務めていたペローを介して、1747年6月20日に警視総監ペリエに送られた。手紙の余白に書き込まれたメモから、ペリエはディドロなる人物について身分、職業、家族関係などを調べるよう、その日のうちにペローに

²⁸ Diderot, *Correspondance*, *op. cit.*, p. 89-90 ; Bonnefon, *op. cit.*, p. 215.

²⁹ ボヌフォンは、その内容をディドロは知らなかったと述べている。*Ibid.*, p. 216.

³⁰ *Ibid.*

指示を出したことがわかる³¹。その2日後の1747年6月22日、今度は密告者本人である司祭がベリエに宛てて、ディドロの行状を密告する手紙を書く。ディドロはサン＝メダル小教区に住む騎馬警察隊長ギヨット (François-Jacques Guillotte) の家に間借りをしていたが、同じ家の住人で、ディドロの考えや行動を知るために彼に近づいた「或る人物」が司祭の主な情報源であった。手紙によれば、ディドロは青年期に放蕩生活を送り、父親に秘密で結婚した。ディドロという名前さえ「仮面」にすぎないかもしれず、才気煥発で話は面白いが、きわめて不敬虔な話しぶりから「少なく見積もっても理神論者」と断定される。約2年前にパルルマンにより断罪され焚書になった2冊の著書のうちの1冊の著者であることを認めたばかりか、それよりさらに反宗教的な危険な著作を1年前から執筆中であることを明かしている³²。——ここでいう「さらに反宗教的な危険な著作」とは、1830年まで印刷されなかった『懷疑者の散歩』だと考えられている³³が、「焚書になった2冊のうちの1冊」とは、既述のとおり『哲学断想』を指す。当初は知られていなかった著者名は、こうして警察の知るところとなったのである。この報告を受けた警視総監ベリエは、すぐには行動を起こさなかったが、警察によるディドロの監視はその後も続き、『不謹慎な宝石』、さらに『盲人書簡』が刊行されるに至って、警戒度は増していった。

第二の種類の密告者は、フランコ・ヴェントゥーリが明らかにしたように、出版業者の中にいた。警察は作家らを監視する手段の一つとして、一部の業者をスパイとして使い、危険な書物に関する情報を集めていた。それらの密告者による報告書は、バステュー古文書のベリエ関連文書³⁴の中に収められている。ヴェントゥーリによれば、書籍商ラマルシュとボナン³⁵は、作家が怪しい原稿を持ち込むたびに

³¹ ペローもベリエもディドロの名をDidrotと綴っていることから、ディドロがまだ当局では無名であったことがわかる。*Ibid.*, p. 202.

³² Bonnefon, *op. cit.*, p. 202-203 ; Diderot, *Correspondance*, éd. cit., t. 1, p. 53-54.

³³ Cf. Wilson, *op. cit.*, p. 62 ; p. 52.

³⁴ *Archives de la Bastille : documents inédits, recueillis et publiés par François Ravaisson*. Règnes de Louis XIV et de Louis XV (1700-1772), Paris, A. Durand et Pedone-Lauriel, t. XII, 1881.

³⁵ ヴェントゥーリは「書籍商」librairesと書いているが、デムリの記録によると、1752年の時点でラマルシュ (Michel Lamarche) の妻は行商人で情報屋であり、ボナン (François

手紙を書き、書物の裏取引の複雑な世界について調査を実施していた。たとえばヴェントゥーリが引用した警察宛ての手紙（1748年1月29日）の中で、ボナンはディドロが『哲学断想』の作者で、『不謹慎な宝石』を発表したばかりであり、現在はそれまでのものよりはるかに過激な著作を執筆中であることを報告している³⁶。手紙の余白に書き込まれたペリエのメモには、「そのタイトルを突き止め、それを印刷する印刷業者を私に知らせること」と書かれている。さらに同年2月14日にボナンは再び警視総監に宛ててディドロの著作に関するより詳しい情報を送っている。そこには、『不謹慎な宝石』を印刷させてそれを販売している書籍商がサン＝ジャック通りのデュランであることや、デュランがディドロに支払った原稿料の金額に加えて、デュランとその同業者ダヴィドとブリアソンが、ディドロになにか起こるのではないかと、それにより、ディドロが翻訳と編集を手がける『医学事典』³⁷の編集が中断されるのではないかと恐れていることが書かれている³⁸。

以上からわかるのは、ディドロが投獄されていた1749年8月1日に書籍商デュランが供述し、その後ディドロも自白した事実の一部を、ペリエはそれより2年以上も前に、サン＝メダールの司祭アルディ・ド・ルヴァレから知らされ、その後の諜報活動をとおして、ディドロの逮捕以前に事実の大部分を把握していたということである。スパイは同じ屋根の下にまで忍び込み、作者と利害が一致するはずの書籍商のうちにも潜んでいた。ディドロの投獄より後のことになるが、百科全書派の敵として知られるフレロンのような作家もスパイ行為をしていたことが知られてい

Bon(n)in) は印刷職人で警視総監ペリエのスパイであった。Joseph d'Hémery, *La police des métiers du livre à Paris au siècle des Lumières : Historique des libraires et imprimeurs de Paris existants en 1752* [...], éd., J.D. Mellot, M.-C. Felton et E. Queval, Bibliothèque nationale de France, 2017, p. 343. 一方、ヴィチュによれば、ボナンは元行商人であり、デムリによって1767年に書籍商として任命された。J.-P. Vittu. « L'inspecteur d'Hémery organise ses fiches : les instruments de la police du livre à Paris dans la seconde moitié du XVIIIe siècle », Gaël Rideau et Pierre Serna (dir.), *Ordonner et partager la ville : XVIIe-XIXe siècle* [en ligne]. Rennes : P.U. de Rennes, 2011 (généré le 30 décembre 2022).

³⁶ Venturi, *op. cit.*, p. 174-175.

³⁷ Robert James, *Dictionnaire universel de médecine*. Traduit de l'anglois par Mrs Diderot, Eidous & Toussaint. Paris : Briasson, David & Durand, 1746-1748.

³⁸ Venturi, *op. cit.*, p. 174-175.

る。その最たる攻撃対象であったヴォルテールは、一種の諷刺詩『哀れな悪魔』(*Le pauvre diable*, 1758) や喜劇『カフェ、またはスコットランド女』(*Le Café ou l'Écossaise*, 1760) の中で反撃し、フレロンが密告者であることを訴えたが、確たる証拠がなく、当時は相手にされなかった。しかし20世紀になり、出版検査官ジョゼフ・デムリの『日記』が研究されるようになると、ヴォルテールが正しかったことが判明する。フレロンは作者やその著作に関する情報を無記名でデムリに提供していた。書類からわかっているだけで、その期間は1750年から1771年にわたるとされる³⁹。敵とはいえ、同業者の中にも密告者がいたのである。このような状況がディドロの著述活動の空間を狭めなかったはずはない。

このように、ヴァンセンヌ前後のディドロはすでに監視の網にしっかりと捉えられていた。財力も権力もない作家にとって、著作を活字にして発表することがいかに困難であったかが、あらためて確認されるのである。そのような状況下で同じ危険を冒せば、自身とその家族を危険にさらすだけでなく、『百科全書』という大事業を危機に陥らせることになる。1749年を機にディドロが自身の著作を刊行しなくなった理由は、こうした事情に求めることができる。さらに、ディドロが収監中に受けたに違いない屈辱を理由の一つに加えられるだろう。警視総監はあらゆる情報を手にしていたにもかかわらず、そのことを知らないディドロ自身の口から事実を聞き出すことに拘った。ネジョンが書いたように、黙秘を通すことが師の名誉となるとすれば、事実はその逆であり、手紙の中とはいえ、ディドロは「目に涙を浮かべながら」ペリエの「足下に身を投げだして」釈放を懇願し、それまでの行状を「悔い改め」、同じ過ちを二度とくり返しませんと約束したのである。毒人参を飲んだソクラテスを憧憬し理想とするフィロゾフにとって、それがどれほど屈辱的だったかは想像に難くない。

³⁹ フレロンからデムリに送られた書類は、1750年から1769年までの刊行物に関するデムリの以下の『日記』の中に見出される。Journal de la librairie de l'inspecteur d'Hémery, B.N. f. fr. 22156-22165 et 22038. またフレロンのスパイ行為を曝いた初期の研究としては、次の2点がある。Cf. Jean Balcou, *Le dossier Fréron*, Droz, 1975, p. 49-135 ; Marlinda Ruth Bruno, « Fréron, police spy », *Studies on Voltaire and the Eighteenth century*, n° 148, 1976, p. 177-199.

2. 地下文書と対話的思考

こうして自著の印刷本をほとんど作らなくなったディドロが表現手段として用いたのが『文芸通信』 *Correspondance littéraire* である。これは1748年にレナル師 (Guillaume-Thomas Raynal, 1713-1796) が『文芸便り』 *Nouvelles littéraires* として創始したものをグリムが継承し、『文芸通信』と改称して1753年に発行を始めた一種の文芸誌である。1773年からはグリムの秘書マイスター (Jakob Heinrich Meister, 1744-1826) が引き継ぎ、1813年まで主宰した。文芸誌といっても発行形態は一般的な定期刊行物とは全く異なる。印刷せず手書きの写本を作って限られた定期購読者に送るという秘匿性の高いもので、定期的に送られてくる一種の地下文書 (manuscripts clandestins) と見做すことができる。

「地下文書」とは、印刷によらず思想を流布するために、手書きで作成された写本をいう。この名で呼ばれるようになったのは20世紀以降であるが、16世紀からその存在が確認されており⁴⁰、17世紀後半から18世紀前半のフランスを中心に回った⁴¹。「哲学的philosophique」という形容詞を付けて呼ばれることが多く、その場合の特徴は、「哲学的」すなわち理性に基づきキリスト教の教義を批判する内容をも

⁴⁰ Antony McKenna, « Les manuscrits philosophiques clandestins : histoire d'une découverte », Philosophie clandestine. *Recherche sur la littérature philosophique clandestine des XVII et XVIII siècles*, <https://philoclandes.hypotheses.org/> (参照2023/01/14)

⁴¹ 1912年にギュスターヴ・ランソンがこれらの手書き文書をまとまった形で掘り起こし、1750年以降に表面化する反宗教思想をそれ以前から書き、論じ、流布していた匿名作者の集団が存在したことを示した。(Gustave Lanson, « Questions diverses sur l'histoire de l'esprit philosophique en France avant 1750 », *RHLLF*, 19^e Année, 1912, p. 1-29.) ついでアイラ・O・ウェイドが1938年に本格的な調査を行い、1700年から1750年に流布した102点の地下文書の目録を示した。さらにミゲル・ベニテスが1978年に大規模な調査を開始し、2003年に作成された目録には292タイトルが含まれた。一方オリヴィエ・ブロックによる哲学的地下文書目録作成チームが1987年にソルボンヌ内に創設、1993年にこの事業を引き継いだアルティガス＝ムナンは、2017年、フランス国立図書館マザリーヌのサイト内に哲学的地下文書の総合的な目録を完成させて公開した。他方、アントニ・マッケナとマリア・スザナ・スガンは地下文書研究のためのプラットフォームを立ち上げ、膨大な数の地下文書の電子化を行い、公開している。<https://philoclandes.hypotheses.org/plateforme-philosophie-clndestine>

つこと、clandestinすなわち非合法であり秘匿的confidentielであること⁴²、さらに、それらが印刷されずに手書きのままであるのは偶然ではなく、本質的なことであるということである。つまり地下文書は、第二第三の「読者＝筆者」による加筆を許す可塑性をその本質とする書物であり、印刷本に対する副次的な存在ではない。アルティガス＝ムナンは、そのような地下文書の様態を次のように説明する。

18世紀の哲学的地下文書は生きた書物、インタラクティブな書物である。[…]
それは読者に無限の白紙を残している。読者は読み終えた本を好きなように書き写せばいい、それを縮約したり展開したり、段落や章をまるごとカットしてそれを消し去ったり他の場所に移したりして。[…]
手書き写本は〔印刷という〕中間物を取り払って紙と精神を近づける。[…]
それは対話を、人間の思想の進歩を、集団の思想の進化を、絶え間ない再検討を促進する⁴³。

たとえばブノワ・ド・マイエの『テリアメッド』のような哲学的地下文書は、まとまりのある一つの著作でありながら、複数の書き手——ぶつかり合い、反論し合い、補完し合う複数の声を許容する。それが思想論争の生きた場なのであり、そのような自由、そのような表現の可動性を確保するためにこそ、それらの著作はあえて手書き文書の状態に留まったのである。

『文芸通信』に話を戻すなら、同誌は月に2回から1回、パリからフリードリヒ2世、エカチェリーナ2世をはじめとするヨーロッパの開明君主らに送られた⁴⁴。内容は、標題のとおり、フランスのさまざまな文学・芸術に関する情報である。一例として1759年前半配本分の主な話題を挙げるなら、パリのフランス座で上演された芝居『軽率な試練』（1月1日）、ルソーによる『百科全書』の項目「ジュネーヴ」を批判するパンフレット（2月1日）、エルヴェシウスの『精神論』（2月15日）、

⁴² 日本語で「地下の」あるいは「非合法の」と訳されるclandestinとは、フランス語では「こっそりと、法に反して行われる」（1762年アカデミー辞典）と定義される。

⁴³ G. Artigas-Menant, *Du Secret des clandestins à la propagande voltairienne*, H. Champion, 2001, p. 370.

⁴⁴ 購読者の詳細については以下を参照のこと。F.M. Grimm, *Correspondance littéraire*, éd. Ulla Kölvig, Centre international d'étude du XVIIIe siècle, 2006, t. 1, p. xcvi-c.

ヴォルテールの『カンディド』（3月1日）、『百科全書』の特認取り消し、リコボニ夫人の近刊小説（4月1日）、アブラム・ショメーを揶揄する誹謗書『哲学者を自称するディドロとダランベールに対するショメーのための覚書』（5月15日）などである。そこからわかるように、娯楽的な情報もあれば、思想的にきわどい内容も含まれる。検閲を免れない印刷本には望めない自由を『文芸通信』の筆者は享受していた。

同誌に掲載されたディドロの記事を網羅的に調査したボーイによれば、寄稿は1754年に始まり、ディドロの死後の1801年まで続き、総数は185点にのぼる⁴⁵。はじめは文芸批評や演劇・美術などの文化的情報など、文芸誌らしい記事が多かった。なかでも重要なのはサロン評であり、1759年⁴⁶から1年おきに1767年まで5回の官展の批評を掲載した。ディドロが『文芸通信』の地下文書的な性質を本格的に活用するようになったのは1770年以降で、この時期を境に自身の著作を多数掲載または連載した。そのなかには、『ブルボンヌの二人の友』（1770）、『これはコントではない』（1773）、『運命論者ジャックとその主人』（1778–1780）、『修道女』（1780–1782）のようなフィクションのほか、『或る父親と子どもたちの対話』（1771）、『ブーガンヴィル旅行記補遺』、『ダランベールの夢』（1782）、また一部はディドロの死後に掲載された『エルヴェシウス反駁』（1783–85）のような思想書もあった。小説を含む以上の著作は多かれ少なかれ「哲学的」な内容を含むため、地下文書としての『文芸通信』の秘匿性が重要な機能を果たしたと考えられる。しかし、ディドロが活用した同誌の地下文書的な性質はそれだけではなかった。

『修道女』と地下文書

そこで想起されるのが、『文芸通信』に連載された『修道女』である。修道女お

⁴⁵ Jean de Booy, « Inventaire provisoire des contributions de Diderot à la *Correspondance littéraire* », *Dix-Huitième Siècle*, n° 1 (1969), p. 353–397. 日本語で書かれた『文芸通信』の詳しい解説としては、次の論文を参照。鷲見洋一「ディドロとドイツ——ゲーテのディドロ読解を中心に」『モルフォロギア ゲーテと自然科学』第25号、特集：ゲーテとフランス啓蒙思想、2003、p. 35–37.

⁴⁶ 『1759年のサロン』は同年10月15日の『文芸通信』に掲載された。*Correspondance littéraire, philosophique et critique de Grimm et de Diderot depuis 1753 jusqu'en 1790*, éd., Taschereau, Jules-Antoine ; Chaudé, Paris, Furne, 1829–1831, t. 2, p. 357–367.

よびその弁護人の視点から教権主義と修道院制の不条理を克明に描き出すこの著作は強烈に「哲学的」な内容を含むが、注目すべきなのはその独特な生成過程である。実在の修道女が起こした修道誓願取り消し訴訟に取材したこの小説は、序文と回想録の二つの部分からなるが、序文はたんなる序文とはいえない重要性と長さをもったテキストであり、その最初の執筆者はグリムだった。訴訟事件にヒントを得たグリム、ディドロと仲間たちは、領地に引きこもるクロワマル侯爵をバリにおびき出そうと、修道女になりすまして侯爵に手紙を書いた。グリムはその往復書簡と事件の顛末をまとめて1770年の『文芸通信』に発表したのである。それから10年後、ディドロはかつて偽修道女の手紙を執筆しながら書き始めていた修道女の回想録に大量の加筆をし、小説『修道女』として『文芸通信』に連載し始め、連載が終わった1782年春に、1770年のグリムの顛末記をやはり大幅に加筆し、『修道女』の「序文」として、『文芸通信』に発表した。

この「序文」を最初に研究した時から疑問であり続けたのが、テキストに後から加えられた「矛盾」である⁴⁷。たとえば1770年の記事では、グリムは常に「私たち」という主語を用いて、ミスティフィカションがメンバー全員の共同行為だったことを伝えているが、ディドロはいくつかの箇所ですべて「私たち」を「私」に変更し、自身が首謀者であったことを印象づけている。また欺されたのは、グリムによればクロワマル侯爵とされるが、ディドロはじつは自分が欺されていたのかもしれないという疑念を挿入している。往復書簡と回想録の関係については、グリムは往復書簡から回想録が生まれた、ディドロは往復書簡の大半は回想録よりも後に書かれたと書き、さらにグリムは、回想録は未完成の断片の状態ですべてそのまま失われてしまったと述べ、ディドロは「ディドロ氏とはちょっとした面識のある私は、この小説が彼によって完成されたこと、そして、それこそが今お読みいただいた回想録だということをつけ加えておきましょう⁴⁸」という一文を挿入している。重要なのは、ほとんどの場合において、ディドロがグリムの言葉を残しながら、それに並置、対立させる形でテキストを挿入していったことである。1770年にグリムが発表したテクス

⁴⁷ Mami Fujiwara, « Structure polyphonique de *La religieuse* de Diderot - une lecture génétique et narratologique », *Études de Langue et Littérature Françaises*, n° 56 (1990), p. 35-51.

⁴⁸ Diderot, *La Religieuse*, éd. H. Dieckmann, J. Proust, J. Varloot, *DPV*, XI, Hermann, p. 32.

トにはなかったこれらの箇所がディドロによって加えられたことは、じつは長い間知られていなかった。アセザはその版（1875年）の註で、ディドロの加筆部分をシュアールのものではないかと注記している⁴⁹。この謎を解明する契機となったのは、20世紀半ばのディークマンによるヴァンドゥル手稿群の発見であった。ディドロの自筆で加筆部分だけが書かれた紙片をディークマンは奇跡的に発見したのである⁵⁰。

加筆した内容が真実であるなら、ディドロはグリムの言説を削除することもできただろう。しかしそれを敢えて残すことにより、一人称体で語る複数の声の間に対話的関係を作り出している。ここでディドロが用いているのは、まさに哲学的地下文書の手法である。地下文書という媒体には、秘匿性という機能のほかに、読者の自由な参加を可能にして複数の書き手の間に対話を生じさせるという重要な機能がある。この機能について、アルティガス＝ムナンは次のようにも述べている。

〔哲学的地下文書の中〕に見出されたのは、無限に可變的で、表現と教化の自由にも思想の実験と複製にも完全に開かれた巨大な知的作業現場、書くことと読むことの完全に交換可能な新しい方法が編み出される場としての巨大な知的作業現場である。こうして利用される手書き文書は、それがはじめから無署名であろうとなかろうと、絶えざる生成のうちにある生きた存在様式、万人に差し出された変形可能な素材、参加へのいざないなのである⁵¹。

ディドロにとって、『文芸通信』という地下文書は、まさにそうした媒体として機能したと考えられる。ディドロが『修道女』を『文芸通信』に掲載し、加筆続けたのは、終わりなき対話に開かれた、生きた作業現場としての地下文書のそのような様態を利用するためだったのではないだろうか。

⁴⁹ Diderot, *Œuvres complètes*, éd. J. Assézat et M. Tournoux, Garnier, 1875, t. V, p. 179, note 2.

⁵⁰ Cf. Herbert Dieckmann, *Inventaire du fonds Vandeuil et inédits de Diderot*, Genève, Droz ; Lille, Giard, 1951 : « The Préface-Annexe of *La Religieuse* », *Diderot Studies*, n°2 (1952), p. 21-147.

⁵¹ G. Artigas-Menant, *Du Secret des clandestins [...]*, *op. cit.*, p. 369.

匿名の共同執筆者

アントニ・マッケナは複数の地下文書間の異文variantesについて、それらは「単なる誤り、原テキストに対する不正確さとみなされることはもはやなくなり、変化しつつある集団的な思想の証人という身分を獲得する⁵²」と述べているが、複数の写本間だけでなく、複数の筆者が参加する一つの写本の中にも、また写本にかぎらず、印刷本であっても、そこに複数の筆者が暗に参加している場合には同じことが言えるだろう。

自身の著作であれ、他人の著作であれ、手稿であれ、刊本であれ、ディドロはそれを読みながら加筆し続けた。『セネカ論』（1778年、1782年）は初版に加筆した第2版を存命中に刊行した珍しい例である⁵³。すでに言及した『修道女』の手稿について言うなら、グリムの記事に加筆して作った「序文」だけでなく、小説本体にもディドロは異なる視点から新たな考えを書き加えて、そこにポリフォニックな構造を作り出している⁵⁴。手稿のまま、最晩年まで加筆し続けたことにより、それは「絶えざる生成のうちにある生きた存在様式、万人に差し出された変形可能な素材、参加へのいざない」として残された。そのため『修道女』の決定稿と呼べるものは存在せず、1796年のビューイソン版以来今日に至るまで、現存する複数の版の組み合わせからなる多様な版本が刊行され続けている⁵⁵。他人の著作においてもディドロの能動的な参加の姿勢は変わらない。たとえばヘムステルホイス『人間とその諸関係に関する手紙』の欄外にディドロが書き込んだ夥しい量の肉筆コメントは、フィロゾフにとって読むことはテキストとの対話であり参加であることを目に見える形で示している⁵⁶。そうしたコメントが欄外に留まらずに他人の著作の中に侵入するとき、

⁵² Antony McKenna, *op. cit.*

⁵³ 『セネカ論』の初版は、ラ・グランジュ訳『セネカ著作集』の第7巻として、1778年12月に刊行された。第2版は初版に膨大な加筆を施したものを単行本として1782年に刊行された。両版の異同については、中川久定『ディドロの『セネカ論』』（岩波書店、1980年）第III部以下に詳しく論じられている。

⁵⁴ Cf. M.Fujiwara, « Structure polyphonique [...] », article cité, p. 35-51.

⁵⁵ Cf. Mami Fujiwara, « Avant-texte, texte, para-texte ; recherche sur le « devenir livre » de *La Religieuse* de Diderot », 『人文学報』第236号（1992）, p. 1-31.

⁵⁶ 1960年、ジョージ・メイはダニー・ハイネマンが所蔵していた同書の刊本に出会い、これを借り出して校訂版を作成した。ディドロの書き込みは写真版で収録されている。

ディドロは匿名の共同執筆者となる。

3. 共同執筆の理想と作者ディドロのジレンマ

ディドロが匿名の執筆者としてレナルの『両インド史』⁵⁷ (1770, 1773, 1780) に参加したことはよく知られている。そのことは同時代人が証言し⁵⁸、ディドロ自身も示唆しているが、しかしそれが著作のどの部分で、どの程度を占めるのかを見極めるのは容易いことではなかった。アナトール・フジェールは膨大な資料を渉猟してディドロとその他多数の匿名の寄稿者がどのような貢献をしたかを示し、ヘルベルト・ディークマンはヴァンドゥル手稿群の中から『両インド史』に用いられた断片群を発見した。ミシェル・デュシェはさらにそれらの手稿に加えてストックホルムに保存されていた『文芸通信』の手稿を『両インド史』各版と比較対照することにより、ディドロ＝レナルの協働の段階的な経過を明らかにし、「新世界の神父」のために書かれた諸々のページと1770年代のディドロの個人的な文書の関係性を示した。それらの成果を引き継ぎ、2010年に刊行を開始した『両インド史』の校訂版には、ディドロの執筆部分が明確に示されている⁵⁹。要するに、研究者らがこれほどの労力を費やさなければ、ディドロの貢献の度合いは後世の読者には知られなかったということである。他人の著作の中に紛れ込んで書いたディドロは、自らの筆者としての資格 (paternité) についてどのように考えていたのか。最後にこの問題を考えるために、ディドロが作者としてのあり方に言及した最晩年のものと考えられ

François Hemsterhuis, *Lettre sur l'homme et ses rapports, avec le commentaire inédit de Diderot*. Texte établi, présenté et annoté par Georges May, Yale U.P., 1964.

⁵⁷ 『両インドにおけるヨーロッパの植民と通商の哲学的・政治的歴史』 Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, Amsterdam, 1770 ; La Haye, 1773 ; Genève, 1780.

⁵⁸ Michèle Duchet, *Diderot et l'Histoire des Deux Indes*, Nizet, 1978, p. 28-31.

⁵⁹ Anatole Feugère, *Un précurseur de la Révolution, L'Abbé Raynal (1713-1796)*, Angoulême, 1922 ; Herbert Dieckmann, « Les contributions de Diderot à la *Correspondance littéraire* et à l'*Histoire des Deux Indes* », *R.H.L.F.*, 1951, p. 417-440 ; Michèle Duchet, *op. cit.*; *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*. Éd., Anthony Strugnell, et al., Centre international d'étude du XVIIIe siècle, 2010.

る『グリム氏宛てレナル神父弁護書簡』 *Lettre apologétique de l'abbé Raynal à Monsieur Grimm*⁶⁰を考察したい。

『両インド史』出版の経緯

手紙の内容をみるまえに、『両インド史』出版の経緯を簡単に見ておきたい。レナルが著者兼編集責任者として発行した本書は、ヨーロッパの植民地に関する百科全書的大著作である。七年戦争後の植民地政策の近代化を目的として、外務担当国務卿ショワズル公が、インドから北アメリカまでのヨーロッパ植民地を調査してその成果を活字にする大企画をレナルに要請したのがそもそもの始まりであった。したがって、ちょうど『百科全書』がそうだったように、はじめから「闘争の道具 *machine de guerre*」として構想されたのではない。1770年の第1版（アムステルダム、八折判全6巻）、1774年の第2版（ハーグ、八折判全7巻）、そして1780年の第3版（ジュネーヴ、四折判全4巻＋地図／八折判全10巻）と増補を重ねるなかで、ヨーロッパ人が植民地で行った暴政や非人道的な搾取の告発はより大胆になり、多数の読者を獲得する一方、官憲からは危険視されるようになった⁶¹。

初版は「アムステルダム」を発行地としているが、本書の出版状況を研究したフランソワ・ムローによれば、フランス国内で印刷され、黙許のもと、元行商人の書籍商ジョセフ・メルランによってパリで販売された。著者名と発行者名は伏せられ、巻頭の「書籍商からのお知らせ」は、本書が「著者の目の届かないところで、著者の許可なしに、間違いだらけの原稿を元に印刷された」こと、また「原稿にくつもの空隙が見つかり、それらを埋めねばならなかった」ことを伝えている。こ

⁶⁰ この手紙は20世紀半ばにディークマンによってヴァンドゥル手稿群の中から発見され、初めて一般読者の知るところとなった。ディドロは『弁護書簡』の最後に1781年3月25日の日付を入れ、急いでしたためたこの手紙をグリムに送るのは、「これを読んでも機嫌を損ねたりしないだろうと思えるほど〔グリム〕を評価できるようになったとき」(*Inventaire du fonds Vandeul*, p. 253) だと書いているが、実際に送り届けられることはなかったと考えられている。この手紙については、中川久定前掲書 (p. 236-239) に詳しい解説がある。

⁶¹ Hans-Jürgen Lüsebrink, Manfred Tietz, « Introduction », *Lectures de Raynal : l'« Histoire des deux Indes » en Europe et en Amérique au XVIIIe siècle*, *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 286, p. 2 ; Andrew S. Curran, *Diderot and the art of thinking freely*, Other Press, 2019, p. 362.

のように、1770年版の「お知らせ」は、慎重を期して作者の名を伏せ、作者に印刷の意志がなかったこと、未完成の原稿に第三者の手が加えられていることを示唆し、さらには標題の「書籍商」を複数形で示すこと⁶²により、発行責任の所在を幾重にもぼかしているのである⁶³。ついで1774年に発行された第2版も、タイトルページを見る限りでは匿名出版といえるが、一部の版本の冒頭、小扉（略標題紙）の前にレナルの横顔を描いた肖像画が氏名（G.me T.mas RAYNAL）とともに挿入されたのは注目すべき変化である⁶⁴。それから6年後の1780年に刊行された第3版は、よく知られているように、レナルの署名入りで発表された。タイトルページの表題の下に、「ギヨーム＝トマ・レナルによる」と明記され、その見開き左側には、第2版のものとは異なるレナルの肖像画（いずれもコシャン作）が堂々と掲げられたのである⁶⁵。

大きな反響を呼んだこの著作は、1772年12月にフランスで発売禁止、1774年8月29日には法王庁の禁書目録に入り、1775年には聖職者会議で断罪され、フランスの警察も警戒を続けるなか、フランス国外を発行地とする海賊版が多数出回った⁶⁶。第3版がジュネーヴで発行されようとしていた1780年8月、政府はその内容がそれまで以上に大胆であることを知り、フランス国内への持ち込みを禁じている。1781年5月には国王顧問会議とパリのパルルマンが相次いで本書を断罪し、レナルの逮捕命令が発出され、さらに3ヵ月後にはパリ大学神学部も同書を断罪した。

『グリム氏宛てレナル神父弁護書簡』

『グリム氏宛てレナル神父弁護書簡』はこのような状況を背景に書かれた⁶⁷。レナル

⁶² « Avertissement des libraires » : *Histoire philosophique et politique des établissements & du commerce des européens dans les deux Indes*, Amsterdam, 1770, t. 1.

⁶³ François Mourot, « L'abbé Raynal et la fabrication d'un best-seller : de l'agent d'influence à l'apôtre », *Dix-huitième Siècle*, 2011/1 (n° 43), p. 544.

⁶⁴ Raynal, *Histoire philosophique et politique*, 2010, t. 1, p. xxxix.

⁶⁵ 肖像画と寓意画の詳細については、以下を参照のこと。大津真作訳、ギヨーム＝トマ・レーナル『両インド史』東インド篇／上巻、法政大学出版局、p. (3) - (4), p. 698-699.

⁶⁶ Raynal, *Histoire philosophique et politique*, 2010, t. 1, p. xli.

⁶⁷ 自筆原稿の手紙の末尾には「1781年3月25日」と記されているが、その直後に、「神父の断罪を叫ぶ声が窓の下から聞こえてきます」と書かれていることから、ポール・ヴェルニエー

は1781年2月から3月頃にジュネーヴからパリへ戻り、ヴェルムヌー夫人の家でグリムとディドロに会う。そのレナルにグリムが突きつけたのが以下の「ジレンマ」である。

あなたが攻撃する人たちはあなたに仕返しできないとあなたは思っているのでしょうか、だとすれば、彼らを攻撃するのは卑怯というものです。あるいは彼らが仕返しできるし仕返ししようとするだろうと思っているのでしょうか、だとすれば、彼らの憎悪に身を曝すのは狂気というものです⁶⁸。

このように言うグリムの念頭には『両インド史』第3版のことがある。正々堂々と署名入りで体制批判をするのは狂気の沙汰、正体を明かさずにそれを行うのは卑怯と断じて、レナルとディドロ、いずれのあり方も揶揄しているのである。このとき何も答えなかったレナルに代わってディドロは筆を執る。「自らの著作の扉に自署する人は向こう見ずであるが愚か者ではない。匿名作者は卑怯者ではない」⁶⁹と反論し、さらに激しく次のように述べる。

彼らは称賛を追い求めなかったし、迫害を恐れなかった。彼らが望んだのは役に立つこと、真実を述べること、それを力強く述べることだった。彼らが矛先を向けたのは、大勢の無実な人々を呻吟させる悪辣な王たち、大勢の愚者や狂人を世に送り込む神聖なる詐欺師たちだった。

[…]

あの非凡な人々の誰かが、不満をもらすこともなく財産、自由、名誉、命を失うことができたとして、私はその人を愚か者と呼ぶだろうか。その人が祖国や

ルは、バルルマンが『両インド史』の焚書を命じた「5月25日」が正しい日付である可能性を指摘している。Diderot, *Lettre apologétique de l'abbé Raynal à Monsieur Grimm*, *Œuvres philosophiques*, éd. P. Vernière, Garnier Frères, 1964, p. 644, note I ; Feugère, 1922, p. 278. バルルマンによる当該の判決については以下を参照のこと。Isambert et al., *Recueil général des anciennes lois françaises, depuis l'an 420 jusqu'à la Révolution de 1789*, t. 27, p. 32.

⁶⁸ Diderot, *Lettre apologétiques*, éd. cit., p. 627-628.

⁶⁹ *Ibid.*, p. 628.

友や同胞を捨てがたく思ったとして、その人を卑怯者と呼ぶだろうか。[…]
その人が自らの言説によって不寛容と狂信の夥しい数の犠牲者にあらたな犠牲者を加えることを予期したとして、この恐怖が彼を制止するだろうか、彼を制止するべきだろうか、否、友よ、否である。民衆は言う。「まず生き、つぎに哲学する。」しかしソクラテスの外套を着る者、真理と命よりも真理と美徳を愛する者、その人はこう言うだろう。「まず哲学し、次に生きる」と⁷⁰。

引用文の冒頭にある「称賛を求めなかった」人たちは匿名作者を、「迫害を恐れなかった」人たちは覆面を外した作者を指すと理解することができる。堂々と名を明かしたレナルのような作者を讃えるとともに、その影で人知れず働き「称賛を求めなかった」匿名の筆者らがいたことをデイドロは強調しているのである。その先ではもはや両者の区別はなく、彼らはともに、真理をはっきり述べて同胞の役に立つことを望む者、死の危険を冒しても哲学する者とされる。一方、グリムの「情けなくもつまらぬジレンマ」は、「偉大な人々の後裔を根絶やしにする」「圧制者らの便利で都合のよい武器」だとして、厳しく批判される⁷¹。ここでフィロゾフが述べていることは、『両インド史』第3版の冒頭に記された思いと重なるだろう。

真理の堂々たる姿は常に私の念頭にあった。おお、厳粛なる真理よ！私が尊重したのはただあなたただだ。〔中略〕人類の幸福にとって重要な諸問題を論じるときになすべき第一の配慮、第一の務めは、自らの精神から一切の恐れ、一切の期待を追い払うことに相違ない。人間的なあらゆる顧慮を超えた高みに昇る、そのときにこそ大気の上を飛翔し、自らの下に地球を見るのである。迫害された天才に、忘れられた才能に、不幸な美徳に涙を落とすのはまさに其処からである。人類を欺く者ども、人類を抑圧する者どもに呪詛と屈辱を注ぐのはまさに其処からである。〔中略〕其処でこそ私は、「私は自由だ」と心底から叫ぶことができたのであり、自分の主題を扱える水準に達したと感ずることができたのである⁷²。

⁷⁰ *Ibid.*, p. 629.

⁷¹ *Ibid.*, p. 628-633.

⁷² Raynal, *Histoire philosophique et politique*, 2010, t. 1, p. 24. 同書の脚註17にあるように、

真理を語り、思想を前に進めるために、作者はこの世的な顧慮を捨て去り、一切を超越し、世界を俯瞰する高みに自らを置く必要がある。すでに見たように、同じことは『セネカ論』において「墓穴の奥底から」とも表現されている。つまり、同時代人から称賛され認められることも、逆に迫害されることも超越し、すべてから解き放たれた視点をとってはじめて作者は十全に真理を語れるのだという信念がここには表明されている。

共作は個々人の協働の合計を超える

しかしながら、ディドロはあらゆる称賛に全く無関心だったわけではない。たとえば『両インド史』における自身の貢献については、レナルとのやりとりを直接話法を用いながら次のように印象づけることを忘れない。

執筆に疲れた私は、自分の仕事の長大さや苦勞を短縮する口実を求めて、レナル神父にこう書いた。「親愛なる神父さん、ああいう脱線は、あなたがどんなに雄弁と感じようとも、あなたの著作をいささか損なうおそれがあると思いませんか。」「いやいや」と彼は答える。「お願いしたことをとにかくやってくれたまえ」―「こんなのは美辞麗句に過ぎないと連中は言うでしょう」「そんなことを言うの？ 誰が？」―「権力者の取り巻きたちですよ」「覚悟はしているとも。いいかね、我が哲学者よ、私は君より読者の趣味がちょっとはわかっているつもりだ。君の文章が私の際限ない計算の退屈を救ってくれるだろう。⁷³」

この文章から、私たちはディドロがレナルから求められて「雄弁な」「脱線」の部分執筆したことを理解する。ディドロは『弁護書簡』の読者としてグリムよりもむしろ後世をイメージしていたとすれば、このやりとりをとおして、自身が『両インド史』の共同執筆者のひとりであること（paternité）を読者に印象づけようとしたとも考えられるだろう。ところが、『弁護書簡』の別の場所にはそれを否定するような表現も見出される。

この箇所はディドロが執筆したと考えられている。

⁷³ *Ibid.*, p. 642-643.

一つ一つのことは、それぞれの行、それぞれのページに理性、知性、力、繊細さ、無限の人類愛がにじみ出ている大著作、君〔グリムを指す〕にも私にも、我々よりましだと自負するほかの人たちにも、たったの1パラグラフも書けないだろう大著作を軽蔑するには、トマの才能やセギエの厚顔をもってしても足りない。これらの巻に盛り込まれた膨大な報告を集めるのに10人の人間が人生の50年を費やしたと断言されたら、私はなおさら驚くだろう⁷⁴。

ディドロ自身にさえ「1パラグラフも書けないだろう」とはどういうことか。この疑問については、『弁護書簡』と『セネカ論』におけるディドロのジレンマを論じたレベシコフの指摘が示唆的である。レベシコフはここで用いられた条件法に着目し、ディドロのような書き手であっても独力では書けないということ、「集合的著作は〔単なる原稿の寄せ集めとは異なり〕、個々の寄稿の合計を超える」ということだと説明する⁷⁵。たしかにここでは集合的著作のもつ力が強調されていると読めるだろう。多数の筆者が参加する著作の中では、読むことと書くことが同時に行われ、そこに対話が生じ、思想が新たに展開する。

『両インド史』を「介入〔討論への参加〕の場*lieu d'intervention*⁷⁶」と見做したミシェル・デュシェは、同書への寄稿を通してディドロの思想が新たな方向に展開したことを確認し、その「文章がレナルの「際限ない計算の退屈」を救ったとするなら、反対に、レナルと企画 […] の野心的な性格のおかげで、ディドロの思想は、おおむね1765年以降に、彼の地平には存在しなかったであろう諸々の問題に向けて舵を切った⁷⁷」と述べている。集合的著作が可能にするそのような思想の展開を目のあたりにしたディドロが、それを自らの名声よりはるかに優先すべきものとするのは自然なことであろう。「前に進むことさえできるなら、覆面で進むことは彼に

⁷⁴ *Ibid.*, p. 638-639.

⁷⁵ Jean-Christophe Rebejkow, « Le dilemme de Diderot : de la *Lettre apologétique de l'abbé Raynal à Monsieur Grimm* à l'*Essai sur les règnes de Claude et de Néron*, *Diderot Studies*, 2014, n° 34 (2014), p. 339-341.

⁷⁶ Michel Duchet, *Diderot et l' "Histoire des deux Indes" ou l'Écriture fragmentaire*, Nizet, 1978, p. 159-176.

⁷⁷ Michel Duchet, « Diderot collaborateur de Raynal : A propos des « fragments imprimés du fonds Vandeul », *RHLF.*, 1960, n° 4, p. 545.

とって問題ではなかった。おそらく彼はその覆面が透明だとわかっていたのではないか。いずれにせよディドロはレナルに作品の功績を、そして勇気の功績を譲るためにあらゆることをした⁷⁸。」デュシェのこの指摘から理解されるように、ディドロにとって匿名は卑怯であるどころか、功績や名声を譲っても思想を前に進める高潔な行為である。この点で、ディドロの営みは、哲学的地下文書の匿名作家たちのそれに似ている。違いがあるとすれば、それはディドロが、同時代から評価されなくとも、後世において不朽の名声を獲得する希望を捨てなかったことである。「すべてはあたかもディドロが『両インド史』の集積の中に自分の痕跡を見出させる鍵を残そうとしたかのように行われる」とミシェル・デュシェは指摘している⁷⁹。同様に、ディドロは後世がディドロの功績を掘り起こして正しく評価することを期待して、『弁護書簡』を含む多数の手稿を残したと考えることができるだろう。したがって、ディドロにジレンマがあったとするなら、それは卑怯と愚かさのジレンマではない。作家として不朽の名声を獲得したい気持ちと、影武者でいいから思想を前に進めたいという思いのそれであったと思われるのである。

＊

＊ ＊

ディドロはなぜその著作の多くを印刷しなかったのか。——本稿はこの問いに答えることができたのだろうか。ヴァンセンヌ前後の状況を詳しくみることにより、少なくとも当時のディドロがそれを諦めた理由は理解できたように思う。また哲学的地下文書の様態とディドロの著述のあり方を比較することにより、両者には多くの共通点があることがわかった。対話と論争と再検討に開かれ、常に進歩の過程にあるようなテキストの動きをディドロは止められなかった、あるいは止めたくなかったのである。さらに『弁護書簡』の考察からは、ディドロが名声を手に入れることにより集合的著作をとおして思想を前進させることに意義を見出していたことが理解される。ほぼ同時期に書かれた『セネカ論』と『両インド史』においても、

⁷⁸ *Ibid.*, p. 544.

⁷⁹ *Ibid.*, p. 543-544.

現世のあらゆる顧慮から解き放たれて真理を述べる自由を熱く語っているように、晩年のディドロは、いわば作家としての煩悩を解脱していたと言えるだろう。しかしだからといって後世という読者を諦めることはなかった。そして現実には後世はディドロの著作を復元してまとめ上げ、正当な評価を与えたのであり、ディドロが参加した集合的著作は啓蒙思想を大きく推進した。そうしたことをディドロが期待し予見していたとすれば、作家として不朽の名声を獲得したい気持ちと、影武者でいいから思想を前に進めたいという「ジレンマ」は、ディドロにおいて、すでに解決済みだったと言えるのかもしれない。

